

レイチェル・カーソンと環境教育

ーセンス・オブ・ワンダーを中心としてー

上遠恵子

ただいま御紹介いただきました上遠恵子と申します。

皆様は、レイチェル・カーソンの『沈黙の春』という本をご存じでしょうか。一九六二年にアメリカで『Silent Spring』という題で発表されたのですが、これが新潮社の新潮文庫から出ております。その著者で海洋生物学者であり作家であつたレイチェル・カーソンでございます。『沈黙の春』というのを御存じの方も多いと思いますけれども、その頃盛んに使われておりました殺虫剤のDDTとかBHCのような、有機塩素剤が環境に与える影響、それが環境を汚染していき、やがて鳥も鳴かず、ミツバチの羽のうなり声も聞こえない、沈黙

した黙りこくった春が来るであろう、という警告を発した本なのです。私たちは人間の便利さだけを追い求めているが為に『沈黙の春』を迎えるような現実を作ってしまったのではないかと思います。

先ほど、稲場先生のお話で、本当に私は感じました。今度の大震災に關してまず私が感じたことは、自然の圧倒的な力に対する、もう何と言いましようか、無力感といいましようか、それをまず感じました。それから、下水のお話にもありましたように目の前から消えてしまえばそれでいい、というような便利なといいましようか、経済性というものを追求した人間の奢りへの反省、そういうものを感じました。そして、危機に直面したときに当面の苦しさか

ら逃れるために、「環境どころじゃない、まずおなか、空腹が問題だ、寒さが問題だ」そういうことから、環境というものが押しやられてしまったことに對する反省というものを感じました。また人間がいかにも総合的にものを見ず、目前のことだけに追われて、本当に命というものに対してどれだけの崇敬の念を持っていたのだろうか、そういうものを見分ける力がなくて人間は不足していたんだろうか、それから行政の見通しの無さと人材の不足、責任逃れ、いろいろなことを感じました。それで、ここで無力感にうちひしがれていたのではない、やはりこうしたことから、この状況の中から今こそ必要なのが、環境教育なのではないかと思っただ次第です。最初、私は『センス・オブ・ワンダー』という、レイチェル・カーソンが亡くなってから後に出版されました、非常にきれいな環境教育に対する示唆に富んだ本、その本を中心にお話をしようと思っておりました。ですけれども、この震災というものを経験いたしまして、やはり『沈黙の春』というものも

もう一度考えて現代的な意義というものを考えてみたいとも思いますので、ほんの少し時間をいただいで、『沈黙の春』の現代的な意義というようなことをお話しし、それからレイチェル・カーソンという人は、名前はどこかで聞いたことがあるけどどんな人だかわからないから、どんな人だったんだろう、ということをお話ししようと思ひまして、少しスライドを用意いたしましたので、こういう人、こんな顔してるんだとか、こんな所で育ったとかそういうこととお話ししたいと思っております。

それから、時間があれば、稲場日出子さんに『センス・オブ・ワンダー』の中から、キーポイントになるようなところを読んでいただきたいと思っております。

まず、『沈黙の春』の現代的意義ですけれども、『サイレント・スプリング』というものが一九六二年に我々に示したものであるのは、まず人工化学物質の乱用に対する警告、地球の生態系の破壊への予告、国家的かつ行政的な対応を促進しなければいけ

ないこと、それからこの本が出たことによって企業側から非常な反撃がありまして、そういうものが激化してきました。それから環境保全運動といいたうか、そういうもののへのエールというか激励にもなりました。それから、ここにおいでになる方、皆さん研究者であり技術者でおられると思いますけれども、そういう方々が環境に対して目覚めた、ということが『サイレント・スプリング』でもって、まず示されました。そして、人類はカーソンの死以後三〇年、もう三三年くらい経つわけですけれども、一体何をして来たのだろうか。ベトナム戦争がありました。枯葉作戦がありました。原発はたくさん出ました。核兵器は乱造されました。それからアグリビジネスによって農業の世界的な拡散もありました。合成化学物質が乱用されて汚染は激化し、冷戦も激化しました。軍事費も増大しました。経済の時代代という大合唱も行われました。それから湾岸戦争も起きました。ソ連が崩壊して民族紛争は激化します。そして地球環境破壊の決定的な立証がされる

ようになりました。そして地球破壊というものは、もう複合的ないろんな原因があって顕在化しています。温室効果、オゾンホール、砂漠化、表土が流出していきます。森林破壊、生物資源は少なくなっています。大気汚染、水質汚濁は進行しています。酸性雨、原発事故の発生、汚染廃棄物処理の限界が見えてきました。そうしたことがあります。そして同時にいろいろなエネルギー資源の限界も見えてきて、人口は激増しています。南北の格差も増大しています。都市問題、難民問題、食料不足、飢餓人口が増加している。いろいろなことがあります。それから危機感というものに対する、認識の希薄性が指摘されるようにもなりました。そうしてまたタイムリミットがあるということ、私たちも感じるようになってきました。考えてみると非常に悲観的なことばかり多いわけなんですけれども、やはり現実には直視しなければならぬと思います。それから、日本の環境対策は成功しているなどというのはおこがましく、そんなことは何もしていないのに、と自

分自身の、いろいろな葛藤への反省をこめて思うのです。森林は破壊され、木材の輸入は激増し、野生生物の保護というものは低調であります。原発の拡大製造がされています。リゾート法などが出来ました。大気汚染とか水質汚濁対策が停滞しています。

それから基礎研究が軽視されています。また食料とか農業対策に対して長期的なビジョンがありません。それから、いろいろNGOとか住民運動への無関心、しかし今これは少しずつ変わってきてきました。今や環境問題に関してはNGOとか住民運動というものを抜きにして考えられなくなってきました。このことは私のようなNGOの者も声を大にして、行政と一緒にするとうか、同等の立場対等にやっていかなければならないと思います。かつて私の経験では、環境庁なんかに行くといくともほろろに追い返される、NGOに何が出来るんだ、というような辛い思いをしたことがございます。けれども、これからはもっと私たちは、自信を持って行動していかなくやらないと思っています。

それからレイチェル・カーソンに学ぶことでは、先ほども申しましたけれども、現実を直視しなければいけません。レイチェルは一九六二年に『沈黙の春』を出すために、五〇年代の後半からずっとその問題に係わっていたわけです。そのとき既に環境汚染ということは放射能についてはいわれておりましてたけれども、化学物質というものに対しては無知でした。今は絶対書いてありませんけれど、昔の殺虫剤には「人畜無害」と書いてありました。

そういうような、虫は殺すけど人間には何でもないといわれていた時代に、ハードな、残留性の強い殺虫剤について警告を発したという先見性、それはやはり彼女が科学者でもあり、そしてDDT、BHC（これは現在、製造も使用も中止されている物質ではありますが、今使われているものに比べればうんと簡単なものです。）を基にして今我々の周りにあるダイオキシンや、インドのボパールの事故に見られましたようにMICガスとか、そういう複雑なもの環境汚染を予見し得た、その先見性というも

の、科学的な先見性というものを学ばなければならないと思います。

それから自然の大きさというものを自覚すること、また自然の価値を忘れない、そしてこれはとても大切なことだと私は思いますが、豊かな感性『センス・オブ・ワンダー』というようなもの、そういうものを育てなければ、環境問題というものが本当に根づいていかないと思います。

もう一つ大切なことは、別の道を選ぶ勇氣を持つということです。このまま突っ走るのではない、立ち止まって、もっとゆっくりともっと不便でもいい、別の道を選ぶ勇氣を持つ、そういうことをレイチェル・カーソンは言っていると思います。私は、本当にこのことをしみじみと、この大震災を通して考えさせられました。

では、そういうような警告を発したレイチェル・カーソンという人がどんな顔をして、どんな生い立ちであったかということをお話したいと思いますので、スライドをお願いいたします。

レイチェル・カーソンは一九六四年に亡くなっているものですから、カラーの写真等はあまり無いし、彼女が動いているビデオのようなものもございません。これは大変古い写真なんですけれども、晩年彼女のサマーハウスのありました東海岸のメイン州のブースベいの森で、バードウォッチングをし、今鳥の声を聞いているところです。五七歳で亡くなる一、二年前の、五〇歳半ば頃のレイチェルの写真です。次、お願いします。

これは、レイチェルが生まれました家です。いま史跡になって残っております、生まれたのはペンシルバニア州のピッツバーグの郊外のスプリングデールという所です。今、レイチェルの家というふうにして「レイチェル・カーソンの家協会」というのが管理しております。

次、お願いします。

これも、古い写真でちょっとはつきりしないんですが、家族です。お父さんだけ写っております。

家族は、お兄さん、お姉さん、レイチェルと両親、という家族です。両親はスプリングデールで農場をしております。根っからの農民ではなく、お母さんは牧師の娘で非常に教養のある人でした。学校の先生をした経験もありました。お父さんはもともと、ピッツバーグで商売をしていたのですけれども、結婚を機にスプリングデールで農場をしております。これはちょうど十二歳頃のレイチェルです。家には、犬が六匹で猫が何匹とか、たいへん動物好きの家族でありました。周りには自然が豊かにありまして、レイチェルはその自然の中で、鳥だの虫だの兎だの、そういうものを友達として育ってまいりました。そのころ、彼女は作家志望でした。「セント・ニコラス・マガジン」という子供向きの雑誌がありました、そこに投稿して銀賞を貰ったりと、文学者に作家になるということを希望しておりました。

次、お願いします。

これは、今も残っております彼女の家で、小さな小屋がございます。この辺はスプリングデールとい

われるだけあって、「スプリング泉」が、水が非常に豊富な所です。そしてこの中に水がこんこんとわいておりまして、そこが冷蔵庫代わりのような保存庫でしょうか、そんな食料庫みたいになっていたといわれております。

次、お願いします。

これもそののだらだと登っていった丘の上に建っておりますので、皆さんもご覧になったことがあると思いますけれども、ちょうどTV番組の「大草原の小さな家」のような家でした。

次、お願いします。

これは一昨年でございますが、「レイチェル・カーソン日本協会」がスタディ・ツアーでレイチェルの足跡を訪ねる旅をいたしました、そのときの光景です。このように、裏庭にベンチなどがありまして、そこが環境教育の一つの教室、野外教室になっております。これは日本人のおばさんばかりですけれども、普段は小学生や中学生などが来ます。この家には、若い生態学者が住んでおりまして、周りの自然

についての説明や環境問題について、いろいろ野外教室を開き、一つの環境教育の拠点になっております。

次、お願いします。

これはレイチェルが高校卒業の時の写真です。一番後ろの列の一番向こうがレイチェルです。このころは高校生といってもこれくらいしかおりませんでした。そして女の子にしてみれば、高校の卒業でもう教育は終わりです。ほとんどの人はそのまま家の手伝いをするとか、あるいは働きに出る、そして上級学校に行くという人は、よほど成績が良いかあるいは余程お金持ちか、それしかおりませんでした。レイチェルも、このころはまだ文学者志望でありました。

次、お願いします。

これは高校を出まして、ピッツバーグにありますペンシルバニア女子大学に入學しました、そのときの寄宿舎の写真です。現在はチャタムカレッジという名前に変わっております。一八八〇年初頭に建て

られた非常に歴史のある女子教育の大学であります。次、お願いします。

これは、その大学のチャペルです。これがキャンパスの中の一番高い所にありまして、この前がずっとスロープになっておりました。学生時代、レイチェルは雪が降ったときなどは、そのスロープに学校の食堂のお盆をお尻の下に敷いて、そりにして滑って遊んだという話を、私が訪ねました時に、まだ存命だったクラスメイトの人が話してくれました。

次、お願いします。

これは最近建てられたレイチェル・カーソン・インシユティテュート（研究所）というチャタムカレッジの中に建てられた建物です。自分の卒業生の中で誇るべき卒業生を記念して建てられたもので、いろいろな環境教育のプログラムを持っておりまして、夏休みだけサマースクールを開くというプログラムもありますし、理学部の学生が、ここできいろいろと環境問題について研究するということもやられております。

次、お願いします。

大学時代に彼女は文学部に入ったわけですから、そこで一つの転機を迎えます。それは二年生のときに生物学の授業を受けまして、そのときに自然界の謎を解く鍵が、生物学の中にあるということを感じまして、非常に迷います。文学者になるべきか、科学者になるべきか、迷いに迷ったあげくについて生物学者になる決心をして、卒業まで動物学を専攻することになりました。そして卒業した時に非常に優秀だったがために、御存じの方もあると思いますけれども、ボストンのずっと大西洋側にあるコッド岬というところにウッズホールという学園都市がございまして、そこに有名な、ウッズホールの海洋生物研究所というのがございます。そこで卒業した年の夏休み、成績優秀のためのごほうびとして、一ヵ月半ばかり研究することが出来ました。そしてそのことがきっかけになり、ジョンズ・ホプキンス大学の大学院に進んで、海洋生物学を専攻することになりました。ここはその頃の建物ではありませんが、

その記念すべきウッズホールの研究所です。

次、お願いします。

これも、そのウッズホールの研究所の建物です。これは一九九〇年にツアーで来た人が撮した写真です。

次、お願いします。

これは、ウッズホールの海洋生物研究所の図書館に掲げられており、墨で英文が書かれているものでちょっとお見せするんですけれども、なぜ墨で書かれたものがあるかといいますと、これは一九四五年に日本が戦争に負けまして、そのころ、三浦半島の油壺の所に今もございますけれども、東大の海洋生物臨海実験所があります。アメリカ軍が進駐してくるときにそこが接収されることになりました。その時の所長が、後になって都立大学長になられた団勝磨さんですけれども、その方が研究所を閉めて去るにあたって、これを書いて玄関に、門の所に貼っていったわけです。それは「君たちがもし東海岸から来たのならばウッズホールの海洋生物研究所を知っ

ているだろう。ここは日本でいうそのウッズホールの

研究所のような所だ。建物は使っている。けれど

も中にある実験器具というものは、若いこれから研

究を続けていくであろう若者たちの為に壊さないで

残しておいて欲しい。」そういう意味のことを書き

まして、「The Last one to G

o」最後に去る者」というふうな署名をして、門の

扉に貼って行ったわけです。そのあと進駐してきた

アメリカ軍の将校がおりまして、その人はきつとか

なりのインテリさんだったのでしょう。この紙を大

事に剝がしましてアメリカの新聞社に送ったそうで

す。そしてその新聞社が「ゴート人への訴え」と称

して記事にした（ゴート人とは、侵略者だった）わ

けですけれども、それを読んだ東海岸の学者たちは、

その自然科学者の平和への願いというものに非常に

感動して、大事に保管して記念としてこのような額

に収めてあるという現実でございます。もうずいぶ

ん色が変わっておりますが、このようにしてやはり

平和でなければ科学は進まないんだということの表

れとしていまだに飾られております。

次、お願いします。

そして、生物学者になり研究者の道を歩いていた

レイチェルは、一九二九年の世界大恐慌とその後遺

症で、一九三五年に父親を亡くし、経済的大黒柱と

なって家族の生活を支えるために、研究者の道をあ

きらめて公務員になります。これはそのころのもの

です。ただ大変幸いなことに、漁業局というところ

に就職できました。そこでやがて魚類や野生生物局

の方に編成替えになります。そこでの広報課とい

いましょうか、いろいろ出版物を出す仕事に就くよ

うになりました。

次、お願いします。

これはずっと飛ぶんですけれども、レイチェルの

次の住処になりました、メリーランド州のシルバー

スプリングという町です。そこにレイチェルの家が

ございます。そこが、つい最近、一九九一年に史跡

として認定されてこういう看板が立ちました。

次、お願いします。

これは私がまだ史跡になる前に訪ねたときの彼女のシルバースプリングの家のたたずまいです。

次、お願いします。

同じように、このような大きな木のある一〇〇〇坪くらいの広い庭がここにありまして、このどこかが彼女の書斎の窓だと思います。

次、お願いします。

これもそのアングルを変えたところですが、このように水仙などの花が咲いておりました。

次、お願いします。

これは裏庭でして、ちょうど住んでいる方がおりましたのでその方たちの生活の一端です。

次、お願いします。

これは、訪ねて行きました時の庭で、この庭の木のいろいろな鳥がやってくるのを、晩年の彼女は癌に冒されておりましたので歩行もままならなかったのですが、窓からそういう鳥の生態を眺めて楽しんでたということです。この三人の女性の一番向こうにいるのがシャーリー・ブリックスさんといいま

して、彼女の親友で、まだ御存命ですけれども、ずっと魚類や野生生物局で同僚でありました。現在はリタイアなさいましたが、アメリカにあります「レイチェル・カーソン協会」の事務局長をしております。

次、お願いします。

これはメイン州のブースベイにあります、夏の別荘の入口です。ずっと針葉樹林の中を歩いて行きますと、このような平屋建ての木造の質素な別荘が建っております。

次、お願いします。

これは、その別荘の庭からちょっと海辺に下りられるんですけども、その潮だまりをのぞいているレイチェルです。

次、お願いします。

公務員をリタイヤして、そのあいだにレイチェルは『Under the Sea Window 潮風の下で』、『The Sea Around Us われらをめぐる海』、『The Edge

of the Sea 海辺」という題で、海に関する著作を書きました。この別荘の右の方は森です。左、目の前は海が見えます。この書斎でもってそれらの著作をものにしていきました。

次、お願いします。

これはその別荘の中のカップボードですけれども、彼女が使っていたままになっています。魚拓のような魚の絵なども貼ってございました。

次、お願いします。

これはペランダから見た風景ですが、庭からごつごつした岩の階段を降りていくと、あの辺は岩礁海岸なもので、砂浜が広々というよりも岩の潮だまりがあるような、そういう海岸に行くことができます。後でお話する『センス・オブ・ワンダー』という本もここで書かれたもので、その森の中あるいは海辺で、彼女の姪の子ども、五歳になるロジャーという子どもとの生活をもとにして、『センス・オブ・ワンダー』は書かれておりますが、それを書かれたのはこのような環境の中で書かれました。

次、お願いします。

これはワシントン中央、ユニタリアン教会の建物です。ここでレイチェルの葬儀が行われた所です。

次、お願いします。

一九六四年四月十四日に、レイチェルは癌に冒されて『沈黙の春』を書いているときも本当に大変な時間との戦いで、書き上げたわけです。『沈黙の春』が世の中に認められ、その二年後亡くなったわけですが、ここの大聖堂の中でお葬式の時には花で一杯になったという話です。

次、お願いします。

これはどうでもいいんですけど、この大聖堂が非常にステンドグラスがきれいで、上の方にある赤い所の真ん中にぼちんと白くありますけれども、あれにはアポロが月から持ってきた石が入って、あれが月の石だということで、ただ写しただけなんです。

次、お願いします。

これはレイチェルが亡くなった後、レイチェル・カーソンを記念して、自然保護区が東海岸のポート

ランドからキテリというところに至る間の海辺沿いの湿地帯、それから森、そこが全部自然保護区になりまして、その入口です。

次、お願いします。

これは「レイチェル・カーソン協会」というのが上の方のほんの二部屋を借りてレイチェルを記念する事業をしておりますけれど、そのある建物です。他の所は有名なNGOであるオーデュボン協会が使っております。

次、お願いします。

これは亡くなる前の夏、最後の夏をメイン州の別荘で過ごした時のレイチェルです。すでに癌は進行しておりました。それでもこのように顕微鏡をのぞいて海の生き物を見るといことは、彼女の楽しみで心の支えでした。

次、お願いします。

これは、レイチェルを象徴するモナーク蝶というんですけれども、皆さん御存じだと思いますが、オカバマダラという蝶で、アメリカでは普通にいる

蝶ですけれども、秋になりますと、南の方に移動していく、蝶の渡りというか、同じ個体が翌年また戻って来るわけでは絶対ないのですけれども、秋になりますと、ひらひらとこのように南に向かって飛んでいきます。そのときの光景なんです、この情景が非常に美しいので、ちょうど今これが出ておりますので、また稲場さんに読んでいただいてもいいでしょうか。これは、死を前にした彼女の非常に澄みきった気持ちというものがよく表されているので、ちょっと今急に思いましたので、読んでいただきます。

『残されたわずかの日々をレイチェルは手紙を書きました。それに対して世界の各地から指示を伝える手紙や、新しい情報も寄せられて来ました。新たな戦いへの意欲は、かき立てられるのですが、レイチェルの生命は燃えつきようとしていました。』

レイチェルはメイン州での最後の夏の終わり、海を見下ろす岩に腰を下ろし、モナーク蝶の秋の移動

を友人と眺めていました。モナーク蝶はオオカバマダラという蝶で秋になりますと南へ移動するので有名な蝶です。

「彼らはたまたまのようにゆっくりと飛んでいきました。見えない力に引かれていくように。彼らは帰ってきたかですって？ いいえそれは生命の終わりへの旅立ちだったのです。その光景があまりにも美しかったので、私たちは悲しさを覚えませんでした。私たちはどんな生物でも、その一生を閉じようとするとき、それを自然の営みとして受けとります。蝶の一生は数カ月ということがわかっています。私たち人間については、その長さを知ることができません。しかし、考え方は同じです。測ることのない一生を終えることも自然であり、決して不幸なことではありません。きらきら羽ばたく小さな生命が、私にそのことを教えてくれました。私は、その中に深い幸せを見出しました」と心境を書いていきます。レイチェルは自分に残された時間が少ないことを、再び夏を迎えることが出来ないであろうことを

知っていました。

「全てのものは海に帰っていく。大海原の流れのなかに。それは時の流れと同じく永遠に流れ続ける。それは始まりであり終わりでもある」

一九六四年四月一四日、レイチェルはシルバースプリングの自宅で五六歳の生涯を閉じました。

どうもありがとうございました。

ということ、このスライドはこれでおしまいです。

このような一生をレイチェルという人は送ったのですが、その中で私はいつも思うのですけれども、どの著作の中にも脈々と流れているものは、生命に対する崇敬の念、そしてあらゆる人間もそれから他の動物も海の中にいる小さな生き物ですら、それは全部この地球をおおっている生命系という一つの網目の中のひとつの網目である、皆同じなのだ、共に生きる、共生ということです。それが彼女の哲学の基本に流れておりました。それは、なんという

か一〇〇円を入れたらすぐに出てくるような、インスタントな知識ではないと思います。レイチェルがそのように思ったり考えるようになったというのは、小さい時からの環境、特に一番大きな影響を受けたのは、母親でした。先ほどもお話ししましたけれども、牧師の娘で、その当時としては非常にちゃんとした教育を受けて、学校の教師もした経験のあるお母さんですけれども、レイチェルを育てるときには専業主婦になっていたわけです。

それで、体の弱かったレイチェルを連れて、周りの自然をよく散歩しました。そして教えたことは、「じいっとよく観察すること。何でもゆっくり見てごらん。そうすると、なにかその不思議なものがわかってくるよ。それから鳥も虫も小さな動物も、みんな同じ生きているものなんだよ。お互いに関わりあいながら暮らしているんだよ」ということを教えてくれました。それで何よりもお母さんが、自然の中で美しいものを見たときに喜ぶわけです。そうすると子どもというのは、母親なり父親なり、大人

が喜ぶものというものにはとても関心を持つものなのです。この頃の子どもというのは、ちょっと生意気な所がありまして、ストリートにお母さんが喜ぶことに「なんだ、そんなもの。面白くないや」というような顔をしますけれども、内心はすごく興味を持っていてものなのです。親が喜ぶこと、親が関心を持つことに子どもは関心を持ちます。ですから私どもは、特に女性としての母親の力というのは、大変大切だと思うのです。お母さんが面白がることを、子どもは関心を持ちます。お母さんが美しいと思ったことを、やはり子どもは美しいと思います。それと同じように、今日は男の方が多いから言うわけではないですけど、父親の面白がることというのはやっぱり子どもは面白がります。ですから、どうぞお父さまあるいはお祖父さまかもしれないけれども、「もう自分の感性は鈍くなっちゃった」などとおっしゃらないで、面白いものを見つけ、子どものほうと一緒にあってそれを探検してみようというのでしょうか、観察してみる。そして、なにもそのことにつ

いて親は知らなくなっているのです。ただ「おもしろいね」ということが、子どもと一緒に共有されただけでとても子どもの感性は広がっていくと思います。

私の知っている若い母親の話ですけれども、小さい子どもが、道で咲いていたお花を採ってきて「お母さん、こんなにきれいだよ」と持ってきました。それは、子どもにしてみると「こんなにきれいなもの、お母さんに見せたい」という気持ちだった。そのときにいろいろな対応があるんですけれども、そのお母さんは、まず「わあ、きれいだね。嬉しいなあ。コップに差しておこう」と言って差しました。

ただ翌朝に見たら、雑草というのはだいたい早く枯れちゃうものなんですけれども、しおれてしまったので「しおれちゃったね。折角○○ちゃん採ってきたくれたのがしおれちゃったから、じゃあまた咲いてるところ、連れてってちょうだい」そしてそこへ行きました。すると、その道端に咲いている花はまだちゃんと咲いておりました。そこでお母さんが「や

っぱりこうやって土に根を下ろしている、自然に咲いている花がきれいなんだよね。元氣なんだよね」ということで、その子も「本当だね。今度、お母さんを連れてきて見せるから取ってくるのはもうやめた」というふうに言ったと、その若い母親は話してくれました。ですから、往々にして「なんでそんな泥んこになったの、持ってきたのよ」と言うとか

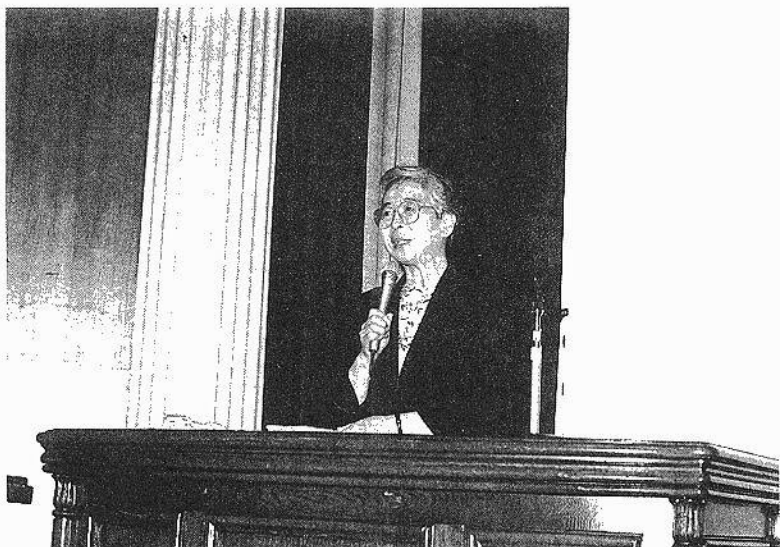
「え？ 汚いものいらないわよ」などと言ってしまいがちですけれども、この辺を一呼吸置いて子どもと一緒に楽しむ、それから子どもの柔軟な気持ちを受け止める、そういうことが必要なんだと思います。

さて『センス・オブ・ワンダー』というのは、先ほども話したように、レイチェルが姪の息子の小さい子どもと一緒に過ごした経験をもとに書いた、こういうきれいな本です。これはレイチェルが亡くなりましてから後に出版されましたが、本当は一九五八年頃にウーマンズコンパニオンという雑誌に掲載されておりました。しかし、彼女はこれをもっとふくらませて、環境教育のための一つの指針という

ようなもので出したいと思っていたのですが、病気が待っていてくれませんでした。それで、亡くなりました後、この原本はもっと写真の多いこういう本なんです。これを友達が出版してくれました、これは本当に美しい本です。そして『沈黙の春』が鋭く環境問題というものを告発し、その正しさを、時の大統領であったケネディが認めて、そして農業取締法を作り、アメリカのEPA（環境保護局）そういうものを作るきっかけになったというほどの社会的な大きな影響を与えた『沈黙の春』を書いたレイチェルにとって、執筆は大事な仕事であると同時に非常に辛かったと思います。この彼女の愛する世界とを、汚し続けている事実というものをあらかじめ書かなければならない気持ち、とても辛かったと思います。それで、最後に私は、レイチェルへの思い出から思うのには、このようなきれいな本が最後のメッセージとして残されたということは、レイチェルにとって本当に幸せだったと思います。そしてそのような偉大な仕事を成し終えた人が、科学

者でありしかも女性であった、そして詩人の魂を持った人であったということに、それはとても同じ女性として嬉しいことであるし、どんなことに携わっていても、感性というものを大事にしていきたいと私は思っています。そしてレイチェルの死は、決して終止符ではないと思います。環境汚染は彼女が生きてきた時よりもますます複雑化して増大してきておりますし、レイチェルは地下に眠っていてもいられないというようなことが世界的に起きています。私たちは、レイチェル・カーソンの意思に触れる時にこのかけがえのない環境教育というものを一つの大きな目標としておりますけれども、その志を継いで私も生きてゆきたいと思っております。最後に、この『センス・オブ・ワンダー』の中の一番メインテーマになるようなところをまた稲場さんに読んでいただいて、私のお話を終わりたいと思います。

では、『センス・オブ・ワンダー』から読ませていただきます。



講師：上遠恵子氏



朗読：稲場日出子氏

「子どもたちの世界は、いつも生き生きとして新鮮で美しく、驚きと感激にみちあふれています。残念なことに、私たちの多くは大人になるまえに澄みきった洞察力や、美しいもの、畏敬すべきものへの直感力をにぶらせ、あるときはまったく失ってしまいます。」

子どもたちが会おう事実のひとつひとつが、やがて知識や知恵を生みだす種子だとしたら、さまざまな情緒や豊かな感受性は、この種子を育む肥沃な土壌です。幼い子ども時代は、この土壌を耕すときです。

美しいものを美しいと感じる感覚、新しいものや未知なものにふれたときの感激、思いやり、憐れみ、賛嘆や愛情などの様々な形の感情がひとたび呼び覚まされると、次はその対象となるものについてもっとよく知りたいと思うようになります。そのようにして見つけ出した知識は、しっかりと身につき、消化する能力がまだ備わっていない子どもにも、事実をうのみにさせるよりも、むしろ子どもが知れた

がるような道を切りひらいてやることのほうがどんなに大切であるかわかりません。」


レイチェル・カーソン日本協会


VOL. 8 JUNE 1982

レイチェル・カーソン日本協会
の機関誌

「レイチェル・カーソン日本協会」
〒540 大阪市中央区
谷町1丁目3-17-813
電話 06-941-3745